

弊社の決済リスク管理状況

株式会社SBI証券

2018/3/12

弊社FXサービスのリスク管理について

<店頭FX業者としての、弊社の決済リスク管理>

(1) 顧客未収金リスク

- 信用リスク管理の観点から継続的に実施
 - (1) 日々 評価損・建玉・保証金上位のモニタリング、赤残発生可能性のモニタリング : システム化・日次実施
 - (2) 弊社シナリオによるストレステスト (ドル円 ±4円 全通貨±3%) : システム化・日次実施
- 金融先物取引業協会シナリオによるストレステスト : システム化・日次実施
- 為替相場モニタリング ⇒ 為替相場変動を常時モニタリング、変動時に顧客損益状況を精査、但し、弊社にポジションはなく即時フルカバーするため自己ポジションにかかる市場リスクはなし

(2) カウンターパーティー（カバー先）リスク

- SBIリクイディティ・マーケット（以下、LM）の決済能力に起因し、カバー取引にかかる決済が滞るリスク
- LMについては ⇒ LMは弊社の子会社でもあり、SBIホールディングスを含む**グループ全体で債務の履行・信用力を補完、顧客取引を保全**する。LMのカウンターパーティーは30行以上でG-SIFIsを10行以上含んでおり、その中でも1社集中を避けて運用。LM破綻や決済トラブルに際しては、弊社が履行主体となり相手先銀行と決済を行うことにより、弊社**グループ起因での外国為替市場におけるシステムリスク顕在化を回避可能**。

(3) 未カバーポジションリスク（ネットオープンポジションに係るリスク）

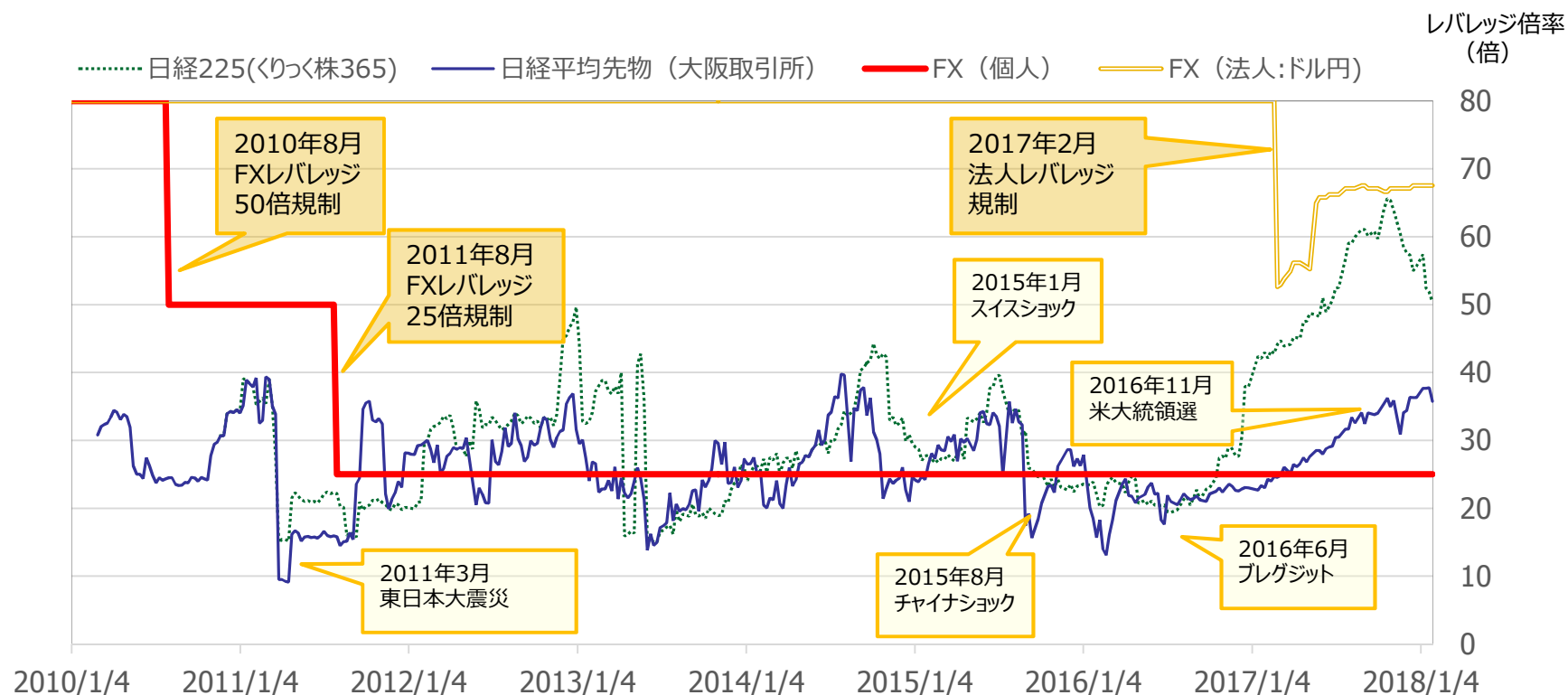
- 弊社は顧客取引をシステムにより自動的かつ即時にLMを相手先としてフルカバー
- LMについては ⇒ 取引先30行以上との間で即時に為替トレーディング、LMではポジション保有(上限等)ルール、モニタリングルール、損失発生時等条件抵触時のポジション解消ルールを整備し運用、東京・ロンドン・NYクローズ毎に3回のポジション最小化
- その状況を、弊社は日次でネットオープンポジションを入手、他の為替リスクとあわせてVaRを算出し経営報告



リスク管理委員会（四半期毎開催・報告） マネジメントへの定例報告（週次）

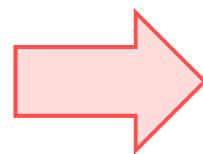
取締役会（四半期毎に報告）

FX及びデリバティブ商品のレバレッジ推移_リスク管理 (1)



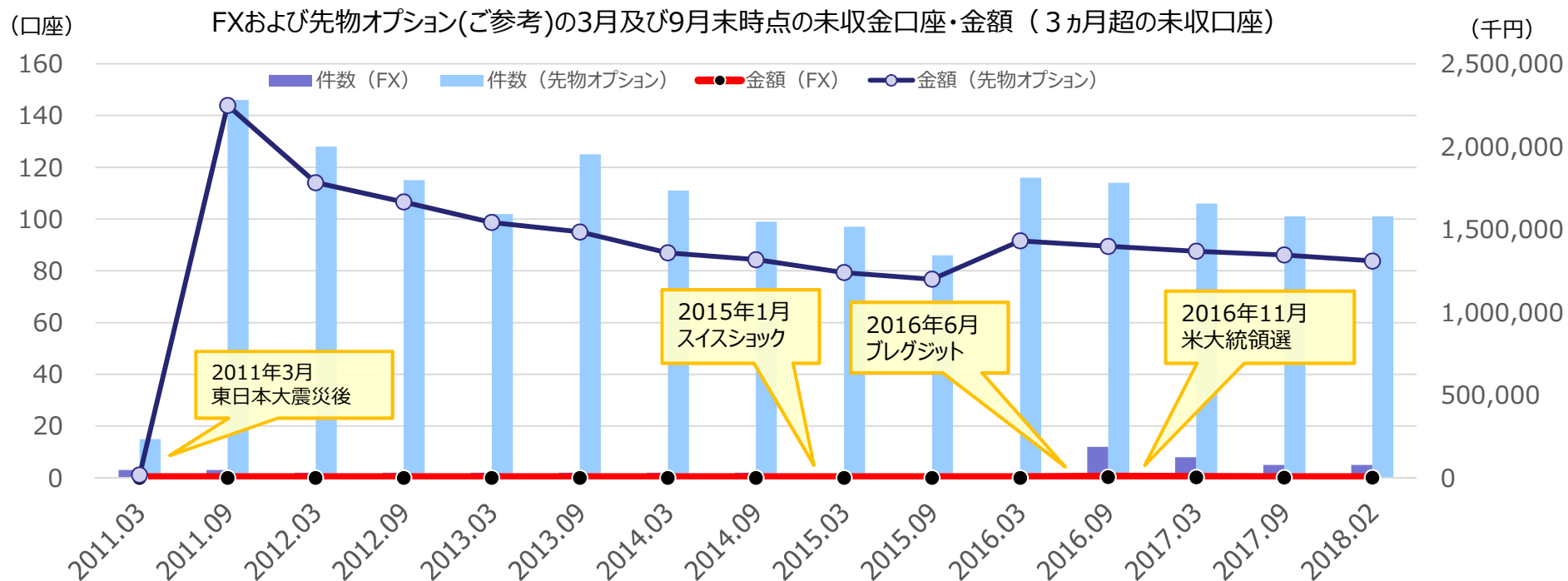
- FXはレバレッジ規制により、2010年に50倍、翌2011年に25倍まで引き下げ、FX（店頭及び取引所）は、他のデリバティブ商品と比較してもレバレッジは低い状況、直近1年の各商品のレバレッジは以下のとおり

FX (店頭FX及び取引所FX) … 一律 25.0倍
 日経平均先物 (大阪取引所) … 平均 30.5倍
 CFD日経225 (くりっく株365) … 平均 52.5倍



FXのレバレッジが最も低い

幣社の未収金口座・金額推移_リスク管理 (1)



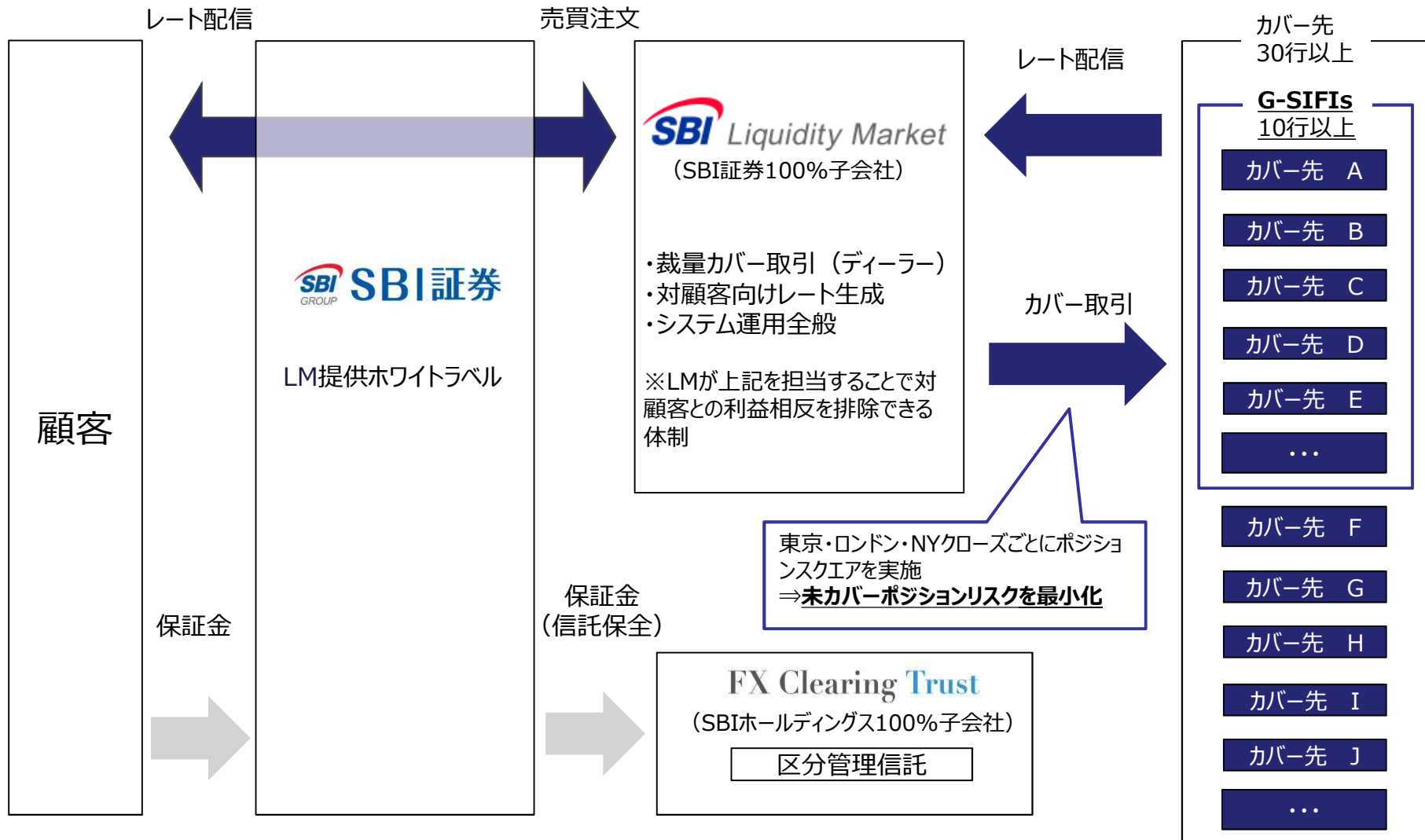
<主なイベント後のFXおよび先物オプション(ご参考)の未収金口座・金額状況>

		3.11震災後 2011.09	スイスショック後 2015.03	ブレグジット後 2016.09	米大統領選後 2017.03	現在 2018.02
総口座数	口座	189,790	459,115	599,162	649,658	751,683
FX	未収金件数	3	1	12	8	5
	未収金金額	千円 (切捨て) 225	0	4,051	2,256	1,254
先物オプション (ご参考)	未収金件数	146	97	114	106	101
	未収金金額	千円 (切捨て) 2,249,212	1,239,662	1,397,956	1,368,451	1,309,353

※未収金口座・・・急な相場変動等によって損失の額が預託した保証金の額を上回り、顧客残高がマイナスの口座

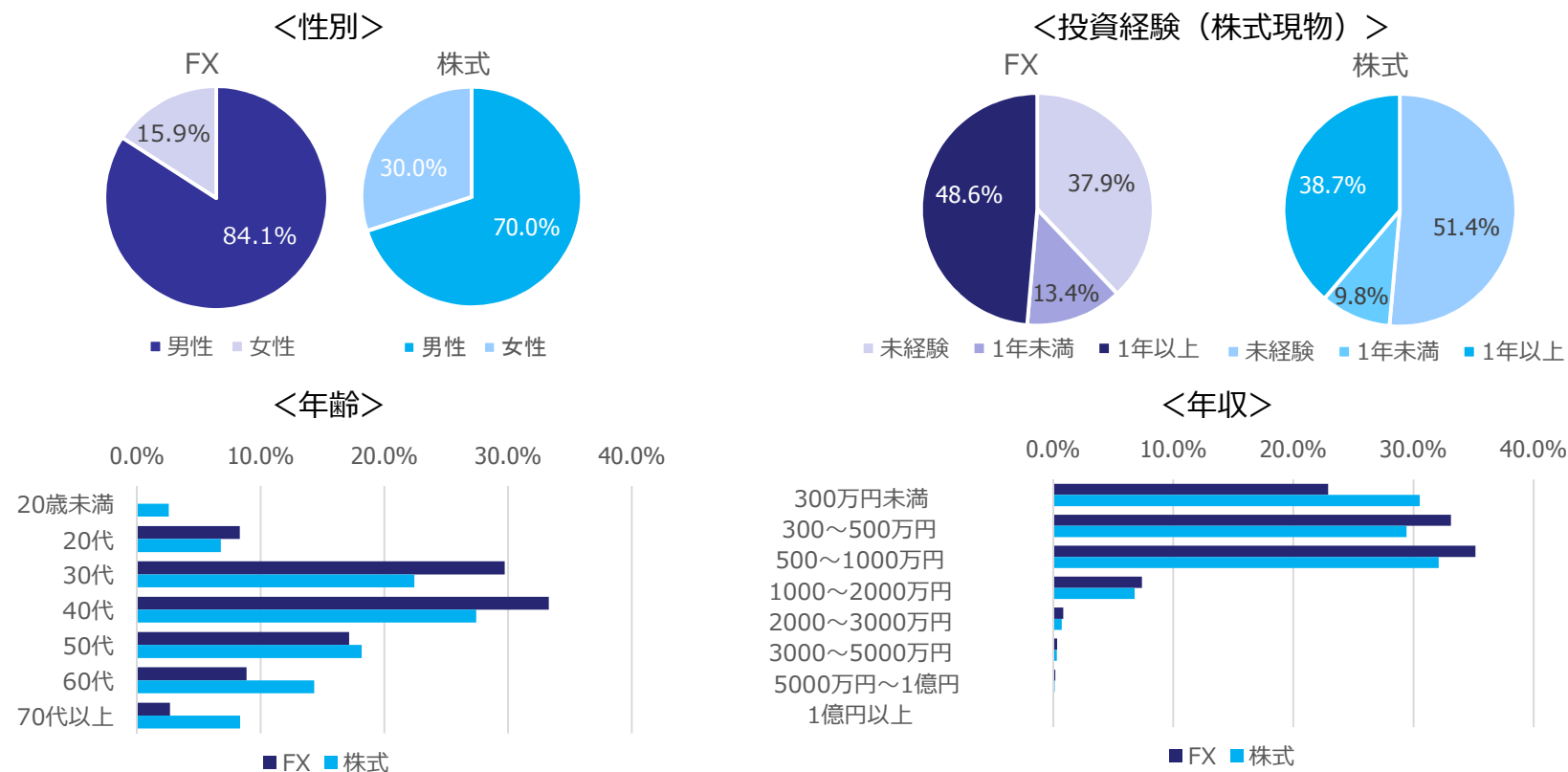
**FXの未収金は先物オプションと比較し、
件数ベースで10分の1、金額ベースで300分の1以下に留まる**

FX事業のビジネススキーム_リスク管理 (2) (3)



<ご参考資料>

FX取引者属性（株式取引者比較）及び特徴



<顧客属性における特徴（株式取引者比較）>

- 男性が80%と多く、株式経験が60%以上あり、投資経験は豊富。年齢層は30代40代で60%を占有し、株式より若い傾向、年収は500～1000万円が最も多く、300万未満は20%に留まる（FX口座は一定の基準[金融資産、年収、職業等]を満たした顧客のみ口座開設可）

<顧客の取引における特徴>

- FX取引顧客の75%以上がレバレッジ25倍コース（取引コース）を選択（10倍コースが約20%）
- 実効レバレッジ（全口座対象）：3.96倍
- 実効レバレッジ（建玉保有口座対象）：5.18倍
- 実効レバレッジ（取引口座対象）：9.61倍

ロスカットルールの決め方

- 弊社のロスカットルールは、預託保証金率（必要保証金÷実預託額）が顧客が一定の範囲で任意に決めたロスカット水準※を下回った場合、弊社の提示する為替レートで、預託保証金率が100%以上になるまで建玉毎に反対売買を行っており、その監視間隔(周期)は1分間隔

※個人顧客は30%～90%範囲で任意に決めることができる（全顧客の7割以上が「50%」に設定）

- ロスカット水準と監視間隔(周期)は、協会規則「金融先物取引業務取扱規則第25条の3に関する細則（外国為替証拠金取引に係るロスカット取引関係）」の別表「ロスカット水準表」を参考に決定している

（別表）

＜金融先物取引業協会作成資料＞

ロスカット水準表

実預託額の監視間隔の区分		基準値	ロスカット水準計算例	
			レバレッジ区分	水準
1	1分以内の場合	対象商品のレバレッジに乗数 0.6 を乗じて得た値 (%)	25倍の場合	15%
			50倍の場合	30%
2	1分を超え5分以内の場合	対象商品のレバレッジに乗数 0.8 を乗じて得た値 (%)	25倍の場合	20%
			50倍の場合	40%
3	5分を超え10分以内の場合	対象商品のレバレッジに乗数 1.0 を乗じて得た値 (%)	25倍の場合	25%
			50倍の場合	50%

ロスカットルールと未収金発生へのインパクト

<ロスカットルールと信用リスク管理上の効果>

- ロスカットによる顧客損失の限定は、顧客自身による手動の損失管理よりも機動的かつ有効
信用取引、先物オプション取引など他の金融商品与信取引との相違
- 受入証拠金不足に対する追加証拠金請求・受入 / 担保処分による充当等のプロセスが迅速かつシステム
チェックに行われる利点あり
- ロスカット水準は顧客の設定、その状況は別紙のとおり30%～90%
ロスカット水準の設定状況により未収金発生リスクが特段高まる等の実態はなく、下限で設定しても上述のよ
うにむしろ他の与信取引よりも迅速な回収が図れている

<ロスカットモニタリング手法>

- こうした特性に鑑み、店頭FX取引の未収金リスクモニタリングは、予めシステムに実装されたロスカットが仕様どおり
(障害なく) 継続的に実行されているかを確認することにより行っている

「システムによるロスカットがルールどおりに的確に実行されているか」

- ⇒ ロスカット実績について、ある分時秒でシステムにより執行された最初の取引から最後の取引まで、レートの不
利・乖離なく全件実施され、ロスカット後預託率が顧客設定預託率どおりにコントロールされているかをチェックし
ている

対顧客価格形成の考え方とその適切性、スプレッド競争の現状に対する評価

▶ 弊社の価格生成方法について

弊社のカウンターパーティであるLMにおける価格の生成の方法は、LMのカウンターパーティー(以下、CP)から受信する価格を用いて機械的に行っている、現在、LMのCP数は30行以上であるが、価格生成には複数CPの価格を採用している

具体的な生成方法は、通貨ペア毎に採用するCPを定義(例：予め複数CPをレート採用候補に設定し、その内、受信価格の上位及び下位各々フィルターを設定し、受信した価格を採用)しており、採用したCPから受信した価格の平均値に、弊社のスプレッドを加算することで、弊社の配信価格を生成している

▶ 弊社が（LMとの価格比較において）乖離していると判定する基準

上記に記載のとおり、LMではCPから受信した価格を用いて機械的に価格を生成しているため、弊社が顧客へ配信した価格が、LMが価格生成の過程で採用したCPから受信した価格の範囲内にあることが、マーケットに準じた実勢価格であると判断

仮に、何らかの理由により、LMがCPから受信した価格の範囲外の価格を配信した場合、弊社はマーケットの実勢価格から乖離した価格を配信する可能性があるが、LMの価格生成の過程では、乖離した価格の生成を抑制する機能が実装

▶ スプレッド競争に現状に対する評価について

主要店頭FX会社のスプレッド競争は行き着くところまで来ている状況、各社広告表示スプレッドは横並びの状態で、原則固定を謳うスプレッドはインターバンクの実勢よりも狭いケースも多い、業界のスプレッド競争自体は一旦落ち着きを見せていると認識

取引所取引との棲み分けについての考え方（取引所が選好されない理由）

<弊社では取引所FXを取扱していないため、一般論での見解>

➤ スプレッド

店頭FXと比較すると、広く固定されていないこと（ドル円3.0前後、ユーロ円3.2前後、かつ変動性）が挙げられる、巨大なFXマーケットを作っているのは短期売買顧客による取引がメインであり、僅かな利ザヤを稼ぐ取引を繰り返すには低コストで取引できることが絶対条件になる、取引所FXが店頭FX並みのコストで取引できるならFX投資家に選考される可能性は十分あるが、取引所FXのコスト（スプレッド）が今以上に下がらない限り、FX投資家は今後も店頭FXを選考していくのではないかと

	取引所FXと店頭FXの主要5通貨ペアのスプレッド差（参考値）				
	米ドル/円	ユーロ/円	豪ドル/円	ポンド/円	ユーロ/米ドル
取引所FX(くりっく365)	3.0前後	3.2前後	3.2前後	4.0前後	3.8前後
業界平均	0.39	0.79	1.01	1.33	0.51

※ 単位（銭）

※ 100万通貨未満取引のスプレッド

※ 業界平均は「店頭外国為替証拠金取引の月次商品別会員別取引状況(協会調査)」上位10社のスプレッド平均

※ 上記「取引所FX」および「業界平均」の各スプレッドは弊社調べによる

➤ 行為規制

行為規制に関し、取引所FXは店頭FXと異なり、契約の締結の勧誘の要請をしていない顧客に対し、訪問したり電話をかけて勧誘をする行為（不招請勧誘）の禁止が適用されていない

この機会に取引所FXの顧客属性及び取引される通貨ペア毎の割合等をあきらかにし、店頭FXと比較し、取引所FXの特徴を把握することで、選好されない理由もあきらかになるのではないかと